
ひぐらしのなく頃に～心迷い編～

夜空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひぐらしのなく頃に〜心迷い編〜

【Nコード】

N4667BA

【作者名】

夜空

【あらすじ】

昭和58年6月の惨劇を回避する事の出来なかった梨花達は時間をループさせ新しい雛見沢へとやってきた。

この世界では惨劇が起きることなく綿流しのお祭りを過ごすことが出来た。

そして惨劇を回避出来たと安心する梨花に今までとは違う新たな惨

劇が…

(注意) この物語の中の鷹野三四は悪人ではありません。そして古手梨花は原作より若干能天気です。

初めて小説を書くので上手く書けるか不安もありますが頑張るので宜しくお願いします。
感想などあったら是非是非お願いします！

新しい世界

昭和58年6月：

「この100年の間一度も回避出来なかった富竹と鷹野の死： そして古手梨花の死： そのどちらも起きず、仲間の誰もが「疑心暗鬼」に囚われる事なく綿流しが終わったなんて： フツ こんな世界が在るなんてね。このままいけば昭和56年6月の壁を越えられるかもしれないわよ羽入！」
そう言いながら沙都子の布団を直す梨花の顔はとても嬉しそうだった。

「あああうう でも梨花： こんなに平和な世界、なにか違和感を感じませんか？」

「フツ相変わらず心配性ね羽入。もう綿流しが終わって3日も経っているのよ、私が見る限りこの世界には仲間たちが「疑心暗鬼」に囚われる要素は見当たらないし、何故だか解らないけれど今までの世界で感じていた死が迫る恐怖を感じないのよね。」

「でもでも梨花！今までの世界では必ず梨花のことを殺す人が居ましたのです： そんなに簡単に安心しては危険なのですよ！あああうう」

「バカね羽入。今までの世界で私を殺してきた犯人は必ずオヤシロ様の崇りに関連付けて私を殺していたはず。だからこの世界で私を殺そうとしている人物が居たとしても来年の綿流しまでは私に手を

出さないはずよ。」

「でもでも梨花ッ！」

「うう〜ん…梨花あこんな夜中にどうかしましたのー？」

「何でもないのですよ。にぱー」

「沙都子起きてしまつからこの話はもうおしまいよ。」

そう言つて話を切り上げた梨花は布団に入り眠りに就いた。

計画

昭和58年6月某日曜日…

「こんにちはー！園崎です。婆っちゃんのお使いできました。」

「はい」

その返事の後顔を出したのは公由家の親戚筋に当たる夏美だった。

「あれー夏美ちゃん！いつこっちに来たのー？」

「昨日の夕方からこっちに来たんだあ」

「そうなんだー！都会暮らしはどうよ？楽しいーい？」

「うん！友達も沢山出来たし結構楽しくやってるよ。この前もその友達に連れて行ってもらったホビーショップがあつて…あつ！そういえば魅音ちゃんゲームとか好きだったよね？そのお店珍しいゲームとか色々有ったから魅音ちゃんきつと気に入ると思うよ！」

「珍しいゲームかあ…良いねえ！おじさんとしては是非ともお目にかけたいねえ…！！」

そう言うと魅音はニヤリと笑った。

「良かったら今度案内するよ。いつがいいかなあ？」

「うーんそうだねえ…あれ？夏美ちゃんはいつまでこっちに居るの

「？」

「明日のお昼頃には向こうに帰る予定だよ。」

「そっか！じゃあ明日おじさんも一緒に行こうかなー！」

「えっ！？魅音ちゃん学校は？」

「くっくっく、それは大丈夫だよー！！！」

翌日

「　　」と言う事で明日の授業は午前中までです。間違えてお弁当は持って来ないで下さいね。あってもカレーならいくらでもOKですよ。」

「「はい……」」

「では皆さん、さようなら。気を付けて帰って下さいねー」

「よーし！部活だぁー！！！」

「今日の部活は一体なにをするんですの？」

「ボクはなんでも頑張るのです。にばー」

「そうだねー今日の部活は…」

「ねえー魅力ちゃん、今日の罰ゲームはちょっと趣向を変えてやるっていうのはどうかな？かな？」

「ん？趣向を変えるってどんな感じに？」

「えっとね、例えばビリになった人が部活メンバーの誰かに告白したりデートするの！」

「うーん…なるほど！それは面白そうだね！！」

「ち、ちよつと待てよ！それじゃ男の俺は勝っても負けても罰ゲームみたいになつちやうじゃねーか！」

「それは違うのです、圭一。レナは魅力に告白するかもしれないし、ボクは沙都子にするかもなのです。女の子同士でニヤーニヤーなのですよ。」

「なるほど…それはそれでおいしいのか、いやでも…うーん」

「圭ちゃんのことほつといて…うん、いいねー！その提案…！じやあ今日の罰ゲームは明日の午後ビリが部活メンバーの誰かとデートするってことで決まりだね！」

1時間後

「ぐはっ…！」

「あらあら、今日の罰ゲームも圭一さんで決まりですね。おーほほほー!」

「圭一は良く頑張ったのですよ。でも今日の魅いはいつもより気合の入りがたが違ったのです。かわいそかわいそなのです。」

「確かに今日の魅いちゃんはスゴかったかな!かな!」

「くっくっく…これくらいでスゴいなんて言葉は聴きたくないなあー!」

「さて圭ちゃん…そろそろ罰ゲームの相手を決めてもらおうか!」

「うう…じ、じゃあレナで…」

(あっちゃん!これじゃおねえの乙女心が…まあ私としてはこれはこれでおもしろいですけど…)

「はう!けけ、圭一くんはレレ、レナでいいのかな?かな?」

「ああ。レナでいいんだよ!」

その日の夜

「おーい礼奈、前原君から電話だぞー」

「はい」

「あっ、圭一君？うん！上手くいったね！後は梨花ちゃんと沙都子ちゃんに例の計画を話して協力してもらうだけだね！だね！

うん、うん、そうだね。わかったよお！じゃあ今から梨花ちゃん達に連絡しておくね！うん。じゃあまた明日ね。」

「もしもし、梨花ちゃん？あのね実は」

作戦会議

翌朝

(うーん：昨日は結局帰りが遅くなって詩音と連絡取れなかったけど大丈夫かな？？とりあえず今日は上手く話を合わせておいて詩音には帰ってから聞くかな？)

「おはよう！魅いちゃん。」

「あつおはよー！レナ！実にいい朝だねー！」

「なんだよ魅音。そんな近所のおばさんみたいな朝の挨拶は！？」

「あつれー圭ちゃん居たの？ごめんごめんおじさん気付かなかったよ。」

「嘘つけ！お前気付いてたしろ！」

「んー？何の事を言われてるのか解らないなー」

「あははー二人共本当に仲良しさんだね！だね！レナはちよっぴり嫉妬しちゃうよ。」

「ちちち、ちよっと！レナアアア！！！」

「まったくレナは一体なにを聴いていたんだ？」

「あはは！魅いちゃん照れてるのかな？照れてるのかな！」

「「うらあー！待てレナア！」

「たくっ！おーいお前らそろそろ行かないと遅刻するぞー」

そして朝の挨拶を済ますと圭一達は走り学校へと向かった。

「おはよー！」

「皆さま方。お待ちしてましてよー！」

「…おはようございますなのです。」

「おはよう。梨花ちゃん、沙都子ちゃん。」

「おーおはよう！沙都子、梨花ちゃん！今日も早いな！」

「そんな事より圭一さん！今日のデートの予定は決めて来ましたの
」？」

「ああ…それは」

「えええええ！でで、でえとおお！????」

「どづいたしましたの？魅音さん…？昨日の部活の罰ゲームは少し
趣向を変えてピリの方が部活メンバーのどなたかとデートをする
という事でしたわよね…？」

「ああうん！そう、そうだよ！いやーおじさんまだちょっと寝ぼけてたよー！あっはははは！」

（もっつ！詩音のヤツー！なに考えてんのよお！…圭ちゃん誰とデートするのかな？）

「たくつ。大丈夫かぁー魅音？」

「大丈夫に決まってるじゃん！そんな事よりデートどこ行くのさ！？」

「ああ、昨日の夜考えてたんだが、やっぱり雛見沢だとやることも限られちまうから興宮まで出ようと思ってる。」

「へー！わかってるじゃん、圭ちゃん！やっぱり雛見沢は暮らすには最高だけど、デートするには自然しかないからねー。」

「まあそんなところだ！」

「はい皆さん！席に着いて下さい！授業を始めますよー」

「はい」

「では昨日連絡をしたように今日の授業はここまでです。皆さん気を付けて帰って下さいね。」

「えええええ！」

「どうかしましたか、委員長さん？まさかお弁当を持って来てしまったのですか？」

「うう…」

「それは困りましたね。カレーだったら私が是非とも頂くんですが…仕方がないのでおうちに帰ってから食べて下さい。」

「はい…」

「では皆さん、さようなら。」

「「さようならー」

「魅いちちゃん今日はどうしちゃったのかな？かな？」

「今日の魅いはまるでいつもの圭一のようなのですよ。かわいそかわいそなのです」

「ううーおじさんとしたことがあ……………」

「なんだ魅音！？今日は1日寝ぼけてたんじゃねーか？」

「魅音さんでもこんな初歩的なミスなさるのですわね！おーほっほー！」

「今日は部活もないんだし大人しく家に帰ってゆっくり休むんだな！罰ゲームの報告は明日じっくり聴かせてやるからよ！」

「そうだね！おじさん今日はゆっくり休ませてもらうよ。」

（早く帰って詩音に昨日の事を聴きたいし丁度良かったー！）

「では皆さま方わたくしたちは失礼させていただきますね。」

「また明日なのです。にぱー」

「おうつ二人共また明日な！」

「梨花ちゃん、沙都子ちゃんバイバイ！また明日ね！」

「それじゃ俺達も帰るとするか！」

「そうだね。圭ちゃんも色々忙しいだろうしねー」

「じゃあ魅いちゃん、また明日ね！しっかり休まなきゃだめなんだよー！」

「そうだぞ、魅音。間違えても遊び歩いたりはするなよな！」

「はいはい！じゃあまた明日ねー」

「おうじゃあな！」

「バイバイ！」

「ふう…これで魅音にはバレル事なく話し合いが出来そうだな！」

「そうだね。梨花ちゃん達との待ち合わせ場所は興宮の図書館だよ。」

「じゃあ俺達も着替えてすぐに向かうか！」

「じゃあ着替えたら圭一くんのおうちに迎えに行くね！」

「おう！じゃあ後でな！」

(はぁー今日はバイトも休みだし暇ですね。ふらふらしているのも疲れるだけだし隠れ家の食料品を買い出しにでも行きますか……あれ？あそこに居るのは圭ちゃんとレナさん……あー、なるほど！昨日の罰ゲームの。面白そうだしちょっとからかいに行きますか！)

「ハロローン。圭ちゃん、レナさん」

「っ！？し、しお、詩音？」

「あつ詩いちゃん！こんにちは！」

「お二人だけで何をしてたんですー？まさかでえとですか？」

「いや！部活の罰ゲームなんだよ！！詩音こそこんな所でどうした

んだよ？」

（くそっ忘れてたぜ！興宮にはこいつが居たんだっ…マズイぞ、このままだと付いて来かねない…なんとかしなくては！落ち着け！クールになれ！クールになるんだ前原圭一！！）

「へーそうなんですかー！なんだか楽しそうですね。私はバイト休みなので暇してたんですよ。よろしければ是非私も一緒にしたいです！」

「すまんが詩音。今日は罰ゲームの内容がデートという事だから二人で色々、本当に色々としなくてはならないんだ。」

「うんそうなんだあ、ごめんね詩いちゃん。レナ達も罰ゲームじゃなかったら良かったんだけど……」

「あちゃーそうですか…それは残念です。でもそう言う事なら仕方がないですね。お二人の邪魔をするのも悪いので今回は諦めます！」

「本当にごめんね、詩いちゃん…また次の機会にでも皆で遊ぼうね！」

「じゃあ俺達ちよつと先を急ぐから…またな！」

「はい。お二人も存分に楽しんでやってくださいねーってもうあんな遠くに行っちゃってます。」

「け、圭一くん…もう大丈夫なんじゃないかな？かな？」

「はあはあ……あ、ああ。それにしても危なかったぜ。もう少しで計画が失敗するところだった。詩音が興宮に住んでる事をすっかり忘れちゃってたぜ」

「そうだね。でも詩いちゃんも上手く誤魔化せたい待ち合わせ場所まで急がなきゃだね！」

「おう！じゃあ急ぐか！」

「うん！」

「お二人共々！！お待ちしてましてよー！！」

「……こんにちはーなのです。」

「おう！待たせたな二人共！」

「遅くなったかな？梨花ちゃんたちは今来たの？」

「着替えてすぐに来たので、だいぶ待つてましたですよ。」

「それは悪い事をしちゃったね。来る途中で色々あって。」

「圭一では仕方ありませんですよ。」

「ちよい待て。…俺が悪役になりゃ丸く収まるのかよ！？」

「もちろん！圭一さんでなくては務まらない大役でしょ？おーっほっほ！」

「実に嫌な大役だな。こんなので丸く収まると思ったら大間違いだぞ！」

そう言うと圭一は沙都子の頭をポカポカと叩き始めた。ポカポカポカポカ……！！

「わああああああんツ！圭一さんがいじめたああああ……！！」

「圭一にいじめられてかわいそかわいそですよ。」

「さ、沙都子ちゃんが泣いてる……！はう……お持ち帰り……！！……悪人はレナがやっつけてあげるからね……！！……！！」

スパパパー……！！……ンツ……！！……！！

レナは沙都子の泣き顔に狂喜して頬擦りし、梨花ちゃんは倒れている圭一の顔をなでなでしている……。

そして、戯れている四人の事を見つめるひとつの陰がそこにあった。

尾行

10分前

「　　つてもうあんな遠くに行っちゃってます。」
（なんか圭ちゃんの様子が変でしたね。うーん怪しいです。……よし！後をつけてみましょう！！面白そうだし！！！！）

図書館前

（あれは！……確か昨日の罰ゲームは部活メンバーの誰か1人とデートだったはず。なんで沙都子や梨花ちゃまが……？うーん！これは何かありますね。これはこれで面白そうだしもう少し様子を見えますか。）

「じゃあそろそろ今回の計画について話し合おうぜ！！！！！」

（計画……？うーんここからじゃ声あまり聴こえませんか。もう少し近付いてみますか！）

そして、大胆にも詩音は圭一達の後ろの席まで近付くと四人の会話を聴き始めた。

「今回の計画が成功したら、魅いちゃんと詩いちゃん喜んでくれる

かな？かな！」

（お姉と私が喜ぶ？何だろ？あああー気になります！もうこうなったら…！！）

「私が喜ぶってどういことですかー？」

「詩音ッ！！？！！！」

「詩音さんッ！！？！」

「詩いちゃん！！？！」

「……………！！？！」

「そんなに驚いてもらえると顔を出した甲斐がありますね、あは…」

「な、何で詩音、お前がここにいるんだ！？まっまさか俺達の後をつけてきたのかッ！？」

「正解です！あの時の圭ちゃん達の様子が少し怪しかったのでつけて来ちゃいました！そんなことよりさっきの私とお姉が喜ぶって計画、是非教えてもらいたいですねー！」

「な、何の話だ…？俺達はそんな事話してないぞ！」

「そんなこと言って、誤魔化そうとしても無駄ですよ。私皆さんが話してたのぜーんぶ聞いてましたから！」

「何ッ！？じゃあ俺達の計画はもう全て知っちゃったのかよ！？」

「はい！ですからお姉にバラされたくなければ私も仲間に入れてください。」

「うっ…それはもうお願いではないのでは…?」

「詩いちゃんそれは完璧な脅迫だよ!だよ。」

「はい。これは私からの脅迫という名のお願いです!まあ答えは聴くまでもないですけど、どうします?」

「…俺達にYes以外の選択肢はねーよな、みんな」

「そのようですね…」

「うん、そうみたいだね。」

「みー」

「皆さんが物分かりが良くて安心しました。じゃあこれからよろしくお願いしますね!」

記憶

「君があんな大それた事をしたせいで私達が責任を執らされる事になったじゃないかッ！！何が雛見沢症候群だ！？女王感染者だのホームシックだの訳の分からん事を言いやがって！！挙げ句の果てには村人全員を自然災害に見せかけて殺すなんて…お前の方こそ病気なんじゃないのかッ！！！！？」

どうしてこんな事になってしまったんだろう…

どこで間違えてしまったんだろう…

もう少しでおじいちゃんの研究が認められるはずだったのに…

ジロウさんを殺してまでやり遂げた結果がこれなの…？

やっぱり神様なんて存在しないのね。いいえ私が神様に嫌われているのね…

こんな未来が待っているのならあの時かみにりに討たれて死んでしまえば善かったんだわ…

……シャンシャン

その時、神々しい光と共に”ソレ”は顕れた。

「だれ…？」

「数多の世界の中で貴女が私に助けを求めるのは、これが初めてです。ね。」

「私がいつあなたに助けを求めたって言うのよ！？」

「貴女は今、後悔をしているのですよね。それしか選択肢がないと思っただけけれど本当は別の選択肢が在ったのではないかと後悔しているのですよね」

「……………」

「人は人である以上罪を侵してしまう。そして人の罪は神である私の罪」

「神ッ!? あなたの様な子供が神ですって!? もしあなたが神だと言うなら私をあの大雨の日に戻して! いいえ、両親が私を置いてデパートに行ってしまったあの日に戻して!! 私も両親と一緒にあの事故で死ぬわ」

「私にはそんな力はありません。でも貴女が強く望むならきっと次は間違えないでしょう」

…………… シャンシャン

昭和58年6月綿流しの1週間前

…………… カナカナカナカナ

「鷹野さん、盛り蕎麦が届きましたよー」

っ!?

その入江の声で我に反った鷹野はいつの間にか頬を伝っていた涙を拭い入江に返事を返した。

「はい。今行きますわ」

ガチャ

「あつ！鷹野さんお蕎麦…」

「聞こえてましたわ。ウフフ」

「ああそうですよね！アハハ」

「今日はご一緒してもいいかしら？」

「ええ構いませんよ！…」

入江が言い終わると鷹野は無言でソファーに腰を降ろした。

「じ、じゃあ頂きましようか鷹野さん」

「ウフフ…入江先生は何を緊張しているのかしらあ？」

「いえ、緊張なんてしていませんよ！ただびっくりしているだけですよ…」

「ウフフ…」

「なんだか今日の鷹野さんはいつもと雰囲気が違う気がする…」

一瞬訪れた無言の後で鷹野がポツリと呟いた。

「沙都子ちゃんと悟史君治るかしら……」

「えっ！？…ええ、治りますよ！！僕がこの命に代えても治してみせます。」

「……………」

「もちろんそれには鷹野さんの協力が不可欠だと思っています……協力して頂けますか！？」

「もうそろそろ午後の診察が始まりますわね」

（鷹野さん貴女は……………）

その日の夕方

いつもの待ち合わせ場所には富竹を待つ鷹野の姿があった。

「やあ鷹野さん、ちょっと遅れてしまったかな？ハハ怒ってるかい？」

「いいえ、そんなのいつもの事ですもの慣れましたわ。でもあんまり待たせてばかりいると、待ちくたびれておばあちゃんになっ

まうわ」

「いやー鷹野さんはいつまでも綺麗だよ」

その時富竹の目に綿流しの準備をする村人達の姿が映った。

「今年ももうすぐ綿流しのお祭りなんだね」

「私は一体どうすればいいのかしら。ただおじいちゃんの研究を世の中の人に認めて欲しいだけなのに……」

「えっ？何か言ったかい？鷹野さん」

その時の富竹の笑顔を見て鷹野は何かを決意した。

「ねえジロウさん、とても大事な話があるんだけど……」

その日の夜

「それは本当なのかい、鷹野さんッ!？」

「ええ。全て本当の話よ。」

「まさかそこまでして……いや確かに今”東京”では多大な影響力を

持った人物が亡くなったばかりで、混乱している最中だ。今そんな事が起これば必ず誰かに責任を押し付けようとするはずだ。”東京”で派閥争いをしている人達には今が絶好のチャンスだ！これは早急に調べる必要があるかも知れないよ鷹野さん。でもそうなる君にも何かしらの調査が入るかもしれない。覚悟はあるのかい？」

「貴方にこの話をすると決めた時に覚悟は決まっていたわ」

そして富竹は”東京”の仲間のへ連絡を取り、鷹野から聞いた話を元に調査を行われその結果、綿流しの夜は何事もなく無事に過ぎていった。

「鷹野さんは今回の事を教えてくれた張本人だから、ある程度の減給はあるかもしれないがそれ以外のお咎めは無しという事に決定したよ。それと今回の件で予算を増やすまではいきませんが、研究期間の方は無期延期になったのでこれからも難見沢症候群の研究を勤しんでください」

「ええありがとう、ジロウさん……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4667ba/>

ひぐらしのなく頃に～心迷い編～

2012年1月15日02時49分発行